

令和 2 年 5 月 26 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04516

研究課題名(和文)戦前戦後期の女性のキャリアパスにおける大学院進学的位置付けに関する歴史的研究

研究課題名(英文)A historical study on the significance of entering to graduate school in women's career paths during the prewar and postwar days

研究代表者

山本 美穂子 (Yamamoto, Mihoko)

北海道大学・大学文書館・特定専門職

研究者番号：70455583

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：1918～45年における帝国大学大学院への女性の進学実態を調べて、東北帝国大学(理学、法文学分野)、東京帝国大学(法学、農学分野)、大阪帝国大学(理学分野)、北海道帝国大学(農学分野)における女性の大学院進学者を明らかにした。そして、化学・法学分野を専攻した女性進学者について、進学動機・背景・進学後のキャリアパス等を明らかにし、戦前戦後期の女性の大学院進学歴史的展開を考察した。さらに、1950～60年代に新設された新制女子大学大学院の文系研究科(修士課程)12校を対象に、大学院の専任教員予定者から女性研究者の経歴を分析し、女性のキャリアパスにおける旧制大学院進学的位置づけを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近現代日本高等教育史研究就中大学史研究において、大学を論ずる上で大学院制度は重要事項である。本研究では、旧制大学院制度がどのように運用され、どのような機能を果たしたのかを、女性のキャリアパスに着目して解明するものであり、従来の大学史研究上に欠如した学術的な意義を有している。女子高等教育史研究上においても、本研究で、新制女子大学の「大学院」を新たに課題設定し、新制女子大学の大学院設置の背景・過程に、旧制から新制への人的連続性と女性のキャリアパスが重層的に作用していることを示唆し、新たな視点を寄与し得たと考える。

研究成果の概要(英文)：In this study, I confirmed women who entered the Imperial Universities graduate school between 1918 and 1945. In addition, I analyzed the careers of female researchers at 12 graduate schools of Women's Universities, which were newly established in the 1950s and 1960s. Among them, I confirmed that there were some women who had entered the graduate school under the old educational system. I considered the significance of the former graduate school in the career paths of female researchers.

研究分野：教育史学

キーワード：帝国大学 旧制大学院 女性研究者 女子高等教育史 大学史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近代日本の教育制度において「大学院」を初めて規定したのは、1886年公布の「帝国大学令」である。帝国大学は大学院と分科大学とで構成し、「學術技芸ノ蘊奥ヲ攷究」する役割を担う機関は大学院であると定めた。その後、1918年12月公布の「大学令」により、帝国大学以外に大学(官立・公立・私立大学)の設置が認められ、それらの大学にも大学院(単科大学では「研究科」)の設置が可能となった。旧制大学院は、制度上、その目的を規定されることはなく、独自の課程・カリキュラム・設備・教官組織等も持っていなかったため、学生は指導教官の下で各自の研究を学部設備を使用して従事することが実状であった(『東京大学百年史』通史二、1985年)。

一方、近代日本における女子中等・高等教育機関は、高等女学校 女子専門学校・女子高等師範学校までであり、中等学校 高等学校・大学予科 帝国大学・官公私立大学といった男子の教育機関と同じ構造をもたず、最高学府として女子大学の設置も認められない不均等な制度下にあった。そのため、女子専門学校・女子高等師範学校卒業者の進学選択・職業選択が著しく狭められていたことは、従来の近代日本女子高等教育史研究より明らかになっている。

しかし、そのような状況下にあっても、女子専門学校・女子高等師範学校を卒業後に、帝国大学等へ進学して学士号を得た女性が1916年以降に現れた。さらに、1918年東北帝国大学大学院に「理学に関する学科を修むる者」として丹下ウメが進学した。それ以降、東京・東北・北海道・九州帝国大学等の帝国大学大学院への女性の進学が、各『帝国大学一覧』・『文部省年報』等で散見されるが、その全貌はわかっていない。

1918年大学令公布下における大学院の制度的考察については、寺崎昌男による研究(「大学院制度史論」、『日本の科学者』12巻5号、1977年5月、4-8ページなど)、『東京大学百年史』通史二(1985年、353-364ページ)が詳らかにしており、先行研究が蓄積されている。しかし、男女ともに大学院進学の実態と歴史的展開については、十分な考察には至っていない。女性の大学院進学者数自体も、『帝国大学一覧』等の資料と照合すると、『北大百二十五年史』通説(2003年)をはじめとした各大学の大学沿革史は、漏れなく記述しているとは言い難い状況にある。大学院に関する史料の掘り起こしについては、所澤潤「東京大学における昭和二十年(一九四五)以前の女子入学に関する史料」(『東京大学大学史紀要』第9号、1991年、61-93ページ)において、1934年中華民国出身の女性(韓桂琴)が東京帝国大学大学院の「法学」へ進学した際の学内文書類が翻刻されたことにとどまっている。古屋野素材「東京大学大学院に関する統計資料(一)」、『東京大学大学史紀要』第1号、1978年、135ページ)は、大学院研究の「今後に残す検討課題」に、「[東大以外の]他機関の出身者・女子学生・外国籍学生等の数量的動向とその実態の把握」を掲げていたが、東京大学に限らず、その課題は現在も課題のままである。日本女子高等教育史上・大学史上において、女性の大学院進学の歴史的過程とそのキャリアパスを考究することは、重要な課題であるといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦前戦後期の女性の大学院進学の歴史的展開を明らかにし、女性のキャリアパスにおける大学院進学の位置付けを考察することである。

本研究では、旧制大学院への女性の進学の実態調査を、1918~1945年における帝国大学大学院への進学を中心に悉皆調査する。その際に、女性進学者数の動向と専攻分野の特色、女性進学者がどのような研究環境を大学院で得られたのか等を調査し、大学院進学前後の女性のキャリアパスを分析する。

あわせて、1950~1960年代における新制女子大学(母校の女子高等教育機関を前身とする)の大学院(修士課程)設置に至る過程において、大学院専任教員候補となった女性研究者の中に旧制大学院修学経歴の有無を調査することにより、女性研究者のキャリアパスに旧制大学院の修学歴がどのような形で影響を与えているのかを考察する。

以上の分析を踏まえて、女子高等教育史・大学史上における旧制大学院の機能を、女性のキャリアパスの面から考察・解明するものとする。

3. 研究の方法

(1)1910~1940年代における帝国大学大学院への女性の進学状況調査(専攻分野、研究テーマ、指導教授・教室員等) (2)帝国大学に進学した女性の従前教育状況調査(出身校、出身校での専攻分野、指導教員等) (3)帝国大学進学前後の女性のキャリアパス調査(職歴・研究歴、研究論文の収集等) (4)大帝国大学に進学した女性に関する回顧録・伝記類の収集・分析調査、(5)出身校(女子高等教育機関)の同窓会誌・名簿類の収集・分析調査、(6)新制女子大学の大学院設置申請書類調査といった6分野に分けて資料調査を行い、研究論文としてとりまとめた。

資料調査先としては、回顧録・同窓会誌・学術雑誌等を所蔵している図書館(国立国会図書館、日本女子大学図書館等)、「大学院学生関係綴」等の帝国大学簿書を所蔵している各大学アーカイブズ(東北大学史料館、東京大学文書館等) 文部省簿書「大学院設置認可申請書」を所蔵している国立公文書館に赴いた。「大学院設置申請書」の各種文書中では、特に「大学院研究科専門課程別担当教員予定表」及び「教員調書」について、記述内容(教員候補者の現職名、予定された職階〔教授・助教授・講師・助手、専任・兼任・兼任の別を含む〕、学歴〔大学・学

部、大学院・専攻〕、学位〔学士・修士・博士〕、教育歴、研究業績等〕の分析を行った。

4. 研究成果

(1)「旧制大学院への女性の進学実態とその分析」を研究課題として、1918～1945年における帝国大学大学院への女性の進学状況とその背景を明らかにした。

1918年より1945年までの帝国大学の大学院を対象とし、「攻究」分野別に、女性の進学状況を一覧化した。1918～1945年における帝国大学の大学院への女性進学者は、大学別でみると、東北帝国大学に14名(理学分野3名、法文学分野11名)、東京帝国大学に3名(法学分野2名、農学分野1名)、大阪帝国大学に3名(理学分野)、北海道帝国大学に1名(農学分野)が確認された。本科(分科大学・学部)の学生として女性の入学を認めていなかった東京帝国大学以外は、出身校である帝国大学の大学院へ本科卒業後に女性たちは進学していた。1916年から女性の学士をいち早く輩出していた東北帝国大学が、大学院進学者数も他帝国大学と比べると圧倒的に多かった。

帝国大学大学院への化学専攻の女性の進学者に着目して、進学背景と進学後のキャリアパスを考察した。化学専攻の大学院進学者2名(丹下ウメ、阿武喜美子)に着目すると、両者共に、大学院進学が学位取得のためではなく、有機化学の研究・実験ができる場を求め続けた結果であったことがうかがわれた。大学院修了後、両者は、それぞれ研究者の道を歩み、その研究実績は博士号の学位取得をもたらした。結果としては、帝国大学大学院は、有機化学を専門とする女性研究者の育成として機能したといえる。

また、丹下ウメには眞島利行教授、阿武喜美子には藪田貞治郎教授が指導をしたように、帝国大学大学院への女性の進学には、女性を受け入れる指導教授が不可欠であった。女性の研究意欲と、受け入れ側の理解・支援・指導があってこそ、帝国大学大学院は女性研究者の育成をなし得たことを明らかにした。

帝国大学大学院への法学専攻の進学者に着目して、進学背景と進学後のキャリアパスを考察した。

まず、改正弁護士法(1933年公布、1936年施行)の施行前に、女性が法学を修学できた帝国大学は東北帝国大学と九州帝国大学であったことから、両大学の法文学部における学部学生としての女性の進学状況を明らかにした。1923～1945年における東北帝国大学法文学部では、女子高等師範学校・女子専門学校等からの女性入学者は90名を数え、聴講生からの本科検定入学者16名を加えると、総数106名に達した。文科専攻者が圧倒的多数を占めたが、法科専攻者は5名いた。一方、1925～1945年における九州帝国大学法文学部では、35名の女性入学者を確認できた。35名中、英文学専攻(7名)に次いで法学・国文学専攻者が多く、各6名いた。東北帝国大学は4名、九州帝国大学は5名の女性の法学士を輩出したが、帝国大学の大学院へ進学する者はいなかった。

次に、1926～1945年における帝国大学の大学院における「法文学」分野の女性の進学状況を一覧化し、進学者18名の専攻を確認した。東北帝国大学には11名、東京帝国大学には3名、九州帝国大学には4名の大学院進学者があったが、法学専攻者が見られたのは東京帝国大学大学院の2名のみであった。法学専攻の2名は韓桂琴と立石芳枝であり、中国人留学生の韓は北平大学、立石は明治大学法学部の卒業生であった。韓桂琴と立石芳枝は両者共に大学院進学が学位取得のためではなく、法学(国際法、家族法)の研究ができる場を求め続けた結果であった。戦後、それぞれの母国において女性の法律家・法学者の草分けとなっており、そのキャリアパスに帝国大学大学院への進学が果たした役割は小さくなかった。

(2)戦前戦後期の女性のキャリアパスにおける大学院進学的位置付けを考察する一環として、1950～60年代に主に新設された新制女子大学大学院の文系研究科(修士課程)12校(私立女子大学10校〔聖心女子・津田塾・神戸女学院・日本女子・実践女子・京都女子・共立女子・同志社女子・金城学院・東京女子大学〕、国立女子大学2校〔お茶の水女子大学・奈良女子大学〕)を対象として、「設置認可申請書」・「設置計画書」(国立公文書館所蔵)に着目し、大学院の専任教員予定者における女性の配置・経歴(大学、大学院、留学等)・学位・研究分野等をまとめ、大学・専攻分野毎でどのような差異・特徴が見られるのかを考察した。

上記12校において、文部省から設置が認可された専攻は、英文学に関する専攻が11校で最多、文学に関する専攻(国文学・日本文学、中国文学)が8校、歴史学に関する専攻(史学、東洋史学)が4校、地理学に関する専攻が2校と続き、哲学専攻・演劇学専攻・教育学専攻・社会学専攻が各1校に設置された。女性の専任予定教員者の経歴を考察すると、英文学・英米文学・日本文学・哲学・中国文学専攻の5専攻分野では、国内の旧制大学に進学して文学士号を取得した女性が見られる。女性の入学を認可した数少ない旧制大学(東北帝国大学法文学部、東京文理科大学、早稲田大学文学部、同志社大学文学部)に進学し、文学士号を取得した女性は13名確認された。1946年度入試から旧制大学でも男女の教育機会が均等となった後では、東京帝国大学(日本文学、英文学、中国文学)で文学士号を取得した女性が4名確認された。学部卒業後に研究の場を大学院や研究科に求めて、東北帝国大学大学院に2名、東京文理科大学研究科に3名、早稲田大学大学院に1名、東京大学大学院に2名、計8名の女性が進学しており、旧制大学は研究者養成の機能を期待されていたことがうかがえた。

(3)今後の展望

旧女子高等師範学校・女子専門学校を系譜にもち、1950～1970年代にかけて新制大学院を設置した大学には、女子高等師範学校を前身とする国立女子大学2校（お茶の水女子・奈良女子大学）、公立女子専門学校を包括・前身とする公立大学3校（東京都立・京都府立・大阪女子大学）、東京・広島文理科大学を包括した国立大学2校（東京教育・広島大学）、私立女子専門学校を前身とする私立大学1校（東邦大学）、私立女子専門学校を前身とする私立女子大学19校（津田塾・聖心女子・神戸女学院・東京女子・同志社女子・昭和女子・甲南女子・梅光女学院・京都女子・金城学院・武庫川女子・大妻女子・梅花女子・文化女子・日本女子・椋山女学園・女子栄養・東京女子医科・共立薬科大学）計27校があげられる。

戦後の新制大学は、母体組織の教育課程をもとに大学の学部・学科、大学院の研究科・専攻（専門課程）を設定したことから、上記の大学が設置した大学院は、文学、教育学、理学、薬学、家政学、栄養学、医学といった、7つの学問領域に大きく分類できる。

本研究では、1950～60年代に主に新設された新制女子大学大学院の文系研究科（修士課程）12校を対象として、大学院の専任教員予定者における女性の配置から、旧制大学院への女性の進学実態を探る方策を見出した。そこで、今後の調査・研究では、本研究を足掛かりに、～の学問領域（研究科）まで調査対象をひろげて、領域別の特質を浮かび上がらせていくこととしたい。

本研究者は、帝国大学への女性の多様な形態（学部学生・専攻生・選科生等）での進学、旧制学位（学士・博士）の女性の取得、帝国大学大学院への女性の進学について、それらの実態・背景・要因・経過を実証的に調査・分析してきた。今後も引き続き、女子高等教育史研究・大学史研究の分野において、近代日本教育制度における女子高等教育機関・帝国大学の機能を、女性の進学・キャリアの面から、一貫して考察していく見通しである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山本美穂子	4. 巻 15
2. 論文標題 1960年代の女子大学大学院文系研究科新設における専任教員予定者について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道大学大学文書館年報	6. 最初と最後の頁 108-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本美穂子	4. 巻 14
2. 論文標題 1918～1945年における帝国大学大学院への女性の進学状況（二） 法学専攻の進学者に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北海道大学大学文書館年報	6. 最初と最後の頁 98-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本 美穂子	4. 巻 13
2. 論文標題 1918～1945年における帝国大学大学院への女性の進学状況（一） 化学専攻の進学者に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道大学大学文書館年報	6. 最初と最後の頁 48-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

北海道大学大学図書館webページ
<https://www.hokudai.ac.jp/bunsho/publication.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----